



TITLE:

明治七年發行の「天文歌」について

AUTHOR(S):

森安, 康平

---

CITATION:

森安, 康平. 明治七年發行の「天文歌」について. 天界 1934, 14(157): 251-252

ISSUE DATE:

1934-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165522>

RIGHT:

## 明治七年發行の「天文歌」について

倉 敷      森 安 康 平

最近倉敷小學校の倉庫を整理してゐて發見した一書を紹介する。和紙和装、本文12枚、着色口繪2頁、表紙などを加へて16枚ある。岡山の石阪秋朗著、備中倉敷の明倫小學校藏版、明治七年第二月開板とある。文字は木版の美事なもので、漢字にはすべて假名をつけ、一頁に四行書いてある。次にその歌の全文を掲げる。今から見ると、足りない點や不都合な點もあるが、それ自體として面白いと思ふ。特別なよみ方には假字をそへた。この本は學校長の許可を得て倉敷天文臺に寄贈することにした。

×

×

×

仰で天(そら)を眺むれば

蒼々として限なし

是を大虚といふぞかし

空濶至虚に見ゆれども

清澄稀微の遊氣(ゆうき)有

遊氣の外に太陽は

常に懸りていつ迄も

處移さず其體は

光明至大の火球なり

其全徑は英國(いぎりす)の

八十二萬と貳千百

四十と八里ありと聞く

水星金星我地球

火星木星土星等

別に一二の星ありて

外圍を互に巡るなり

此衆星の總名を

大遊星といふぞかし

猶この外に數々の

小遊星もありとしれ

地球も同じ星なれば

大遊星のひとつなり

近く望めばその光

分明なるは大陰ぞ

さて大陰の其躰は

小遊星の一にして

其全徑は英國の

二千と百と七十五里

地球と共に太陽の

外圍を廻(めぐ)り太陽の

光をうけておのづから

明暗晝夜の分(わかち)あり

地球は常に自轉して

獨樂子(こま)の廻るに異ならず

自轉の機(しん)の兩端を

南北極といふぞかし

地球の面が太陽に

向うた時が晝なるぞ

背(そむい)たときを夜としれ	其一轉が一日ぞ
三百六十五轉して	天の度数を一周し
元度に復(かへ)るが一年ぞ	天度(てんど)は三百六十度
西と東は經(たて)なるぞ	北と南を緯(ぬき)と知れ
中は赤道南北を	南緯北緯と名づくるぞ
冬は斜に日をうけて	夏は直(たゞち)に日を受ける
春秋二季は平分に	日影を受けるそれ故に
四季の更(かはり)も有としれ	地球の面の全徑は
皇國(みに)の法の里數にて	壹萬零々八十里
日月地球の三體が	同じ經緯の度にあたり
出會た時が蝕なるぞ	小遊星は金星と
我が地球とに一個つゝ	土星に五つ木星に
四個を合せて十一個	大遊星に附屬して
明暗盈虚は大陰の	地球に於るとおなじ事
大小星の其外に	また恒星の一種有
遠く望めば一點の	螢のかげに異ならず
是も一箇の火球にて	わが大陽と同じ事
俗に所謂天の川	衆恒星の群集して
河象を成すに外ならず	至遠の天の外なれば
其理(ことわり)は知り難し	また彗星の一種あり
光芒ながく尾を曳て	甚怪しき星なれど
また遊星の外ならず	其行道の長ければ
多年の後に壹度づゝ	わが天頂を過るなり
彗星天に出る時	天災地妖の徴といふ
無稽の俗説笑ふべし	上に擧たる畧説は
唯天文の一斑を	童のために筆記して
窮理の門の開き初	其堂室に入らむには
他の博物の書を觀るべし	(以 上)

山本曰く、之れは實に愉快な歌だ。そこらあたりのモダンボーイたちが作るものと違つて、口に唱へて、ごく自然に覺えられる。之れは大發見といひたい。